

別紙 3

厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業

分担研究報告書

脊柱靱帯骨化症に関する調査研究

頰椎脊柱靱帯骨化症術後残存疼痛に関する研究

研究分担者 高相晶士 所属機関 北里大学医学部整形外科学 役職 教授

研究要旨 頰椎後縦靱帯骨化症 (OPLL) 術後に残存する疼痛を神経障害性疼痛の評価ツールである PainDetect (PD) 質問票、SpinePainDetect (SPD) 質問票を用いて評価した結果、3 割から 4 割程度の患者は術後神経障害性疼痛が残存しており、約半数の患者が残存する疼痛に対する薬物治療を受けていなかった。

A. 研究目的

昨年度までの研究において、頰椎 OPLL 術後に残存した疼痛の有病率とその危険因子について調査を行なった。その結果、頰椎 OPLL 術後には 40-50%程度の何らかの疼痛が残存していることがわかり、高齢であること、罹病期間が長いこと、術前 JOA スコアが不良なことが危険因子であることを明らかにした。今年度は術後に残存した神経障害性疼痛に着目をして、その評価ツールである PD 質問票と SPD 質問票を用いて調査を行なった。

B. 研究方法

頰椎 OPLL 術後 1 年以上経過した 208 例 (男性 148 例、女性 60 例、手術時平均年齢 62.4 歳、調査時 68.5 歳) を対象に PD 質問票、SPD 質問票による術後残存する神経障害性疼痛について調査を行った。JOACMEQ の 5 つのドメインのスコアや疼痛に対する治療状況についても調査を行なった。並びに、頰部痛・胸の締め付け感・上肢・下肢の VAS スコアを調査し、各々の神経障害性疼痛スコアと各スコアの相関を調査した。

C. 研究結果

疼痛有病率は 82.2%、PD 質問票ならびに SPD 質問票で評価した神経障害性疼痛の有病率はそれぞれ 28.4%、44.2%であった。また、それぞれの疼痛ある群の治療率は

39.4%、53.8%、45.9%であった。PD 質問票における神経障害性疼痛あり群となし群の JOACMEQ のスコアの比較では、あり群は全てのドメインにおいて有意に低値であった。

D. 考察

頰椎 OPLL 術後に残存する疼痛の有病率は 8 割以上であり、神経障害性疼痛の有病率は 3 割から 4 割程度であった。しかし、半数程度の患者が術後残存する疼痛に対する薬物治療を受けておらず、術後の JOACMEQ のスコアが不良であった。

E. 結論

頰椎 OPLL 術後に残存する疼痛、神経障害性疼痛の有病率は高く、さまざまな機能障害をきたしている可能性がある。しかし、薬物治療などが不十分な可能性があり、今後術後残存疼痛に対する治療の充足が望まれる。

F. 健康危険情報：なし

G. 研究発表

Miyagi M, Inoue G, Yoshii T, et al. Residual Neuropathic Pain in Postoperative Patients With Cervical Ossification of Posterior Longitudinal Ligament Risk Factors for Residual Neuropathic Pain. Clin Spine Surg. 2023 inpress

H. 知的財産権の出願・登録状況：なし